

大辞林4.0 for ATOK

－ 凡例 －

- ATOK連携電子辞典版は、書籍版とは字体や約物、書式など一部異なります。

■大辞林の凡例

【略語・記号一覧】

品詞欄

(名)	名詞	(トタル)	「〜と」(副)「〜たる」(連体詞)
(代)	代名詞		の形で用いられるもの
(動五)	動詞五段活用	(連体)	連体詞
(動五〔四〕)	動詞口語五段活用・文語四段活用	(副)	副詞
(動四)	動詞四段活用	(接続)	接続詞
(動上一)	動詞上一段活用	(感)	感動詞
(動上二)	動詞上二段活用	(助動)	助動詞
(動下一)	動詞下一段活用	(格助)	格助詞
(動下二)	動詞下二段活用	(接助)	接続助詞
(動力変)	動詞力行変格活用	(副助)	副助詞
(動サ変)	動詞サ行変格活用	(係助)	係助詞
(動ナ変)	動詞ナ行変格活用	(終助)	終助詞
(動ラ変)	動詞ラ行変格活用	(間投助)	間投助詞
(動特活)	動詞特別活用	(並立助)	並立助詞
(形)	形容詞	(準体助)	準体助詞
(形ク)	形容詞ク活用	(接頭)	接頭語
(形シク)	形容詞シク活用	(接尾)	接尾語
(形動)	形容動詞	(連語)	連語
(形動ナリ)	形容動詞ナリ活用	(枕詞)	枕詞
(形動タリ)	形容動詞タリ活用	スル	サ変動詞の用法

専門用語

〔哲〕	哲学	〔数〕	数学
〔論〕	論理学	〔物〕	物理学
〔倫〕	倫理学	〔化〕	化学
〔仏〕	仏教	〔天〕	天文学
〔言〕	言語学	〔地〕	地学
〔心〕	心理学	〔気〕	気象学
〔法〕	法律	〔電〕	電気工学
〔経〕	経済	〔建〕	建築
〔教〕	教育	〔音〕	西洋音楽
〔医〕	医学	〔美〕	美学・美術
〔生〕	生物学	〔文〕	文法

記号

▼	常用漢字表にない漢字
▽	常用漢字表にない音訓
《 》	常用漢字表「付表」の語
〈 〉	熟字訓
()	送り仮名の許容
« »	漢字の使い分け
[1] - [2] - [3]	アクセント
◆	地名の見出し
●	人名の見出し
文	文語形
季	季語
図	図参照
表	表参照
漢	漢字項目参照
始	開始日付
終	終了日付
[慣用]	慣用句
[可能]	可能動詞
[派生]	派生語
[表記]	同訓の漢字の使い分け
[分類]	分類情報への参照
[類語]	類語一覧への参照
→	参照項目
↔	対義語
▽↔	対義語。二つ以上の語義区分に共通する場合
⇒	解説のある見出しへの参照

【序】（第四版）

本書『大辞林』は昭和の末に初版、平成の前半に第二版、後半に第三版と版を重ねて来た。いずれの時も、編集に当たっては、古代から連綿と続く日本語を刊行時それぞれの「現在」の視点からしっかりととらえ、それを一冊ものの大型国語辞典の中にまとめ収めることを自らの任務として来た。今まさに令和という時代の始まりの年に第四版を刊行するにあたり、あらためてこの役割を意識し、私たちの社会・文化の礎である長きにわたる伝統を踏まえた日本語の姿を提示すること、社会の姿を映し出す新語や新しい語義・用法を今の時代の言葉としての的確に位置づけること、殊にこの二点に再び力を注いだ。

三版刊行後、日本社会は度重なる震災や水害など未曾有の苦難を経験してきた。また、国際社会もグローバル化の急速な拡大とそれへの反動、そして頻発する紛争やテロなど、多くの問題と課題を抱えている。科学技術の面では、例えば、急速に発達を遂げる人工知能（AI）が、知性とは何か、学習とは、知識とは、そして意味とは何か、という問いを突きつけている。新たな事象の発生は、言葉とともに世界を駆け巡り、社会に広がる。

かつて二版の「序」に記された「国際化」「情報化社会」の様相は、およそ四半世紀経った現在、いっそう広汎にわたって進んでいる。外国から多くの人々が訪れ、就労するようになり、またスマートフォンをはじめ電子メディアはさらに拡大し、旧来のメディアを圧倒するようになった。多くの日本語の非母語話者と共生して行く時代の国語辞書の役割とは何か、また、情報を固定することによって、その時代の言葉の記録・証言となりうるといふ冊子体の辞書の役割のみにとどまらず、今現在の、そしてこれからの時代の辞書として、電子版も含めた総体としての一冊ものの大型国語辞典のあり方とは何か、それらの課題にも今次の改訂は向き合うものとなった。

本辞典の編者、松村明先生が二〇〇一年に逝去されてから十八年を数える。第四版の改訂も先生の作られた基本方針を堅持して行なったが、特に今回は、沖森卓也先生にご指導を仰ぎ、さまざまにご尽力をいただいた。ここにあらためて記して感謝申し上げる。

どのような事象・課題にも、その考察や検討の根底には言葉がある。一文字、一語から学び、日々知識を積み上げ、それらを生かして行くのが課題解決への道であると示す「下学上達」の教えのように、古来の知恵の集積としての言葉、そして現代の情報の集積としての言葉を収めた辞書として、本辞典が、ささやかながら読者諸賢の日常の用の助けとなることを望むものである。

二〇一九年七月

三省堂編修所

凡例

編集方針

- 一、この辞典は、現代の言語生活に立脚し、現代語を中心に古語や百科語をも含めた総合的な国語辞典として編集したものである。収録した項目は、日常用いる言葉はもとより、万葉集・源氏物語をはじめとするわが国古典にあらわれる語、医学・工学・物理学・法律・経済など各専門分野における用語、および地名・人名、漢字見出し語、アルファベット表記語など、あわせて約二十五万一千項目におよぶ。
- 二、言葉を形・音・義の三面からとらえ、書き表し方、アクセントを示し、丁寧な語釈・用法の記述に力点を置いた。
- 三、解説にあたっては、多義語は最初に現代語としての一般的な意味・用法を記し、そのあとに順次特殊な意味・用法、古語の意味・用法を記した。語の歴史の変遷にも意を用い、語源・語誌・用法などについても注記した。
- 四、国語項目については用例を重視し、現代語には作例を、古語には古典からの引用例を掲げることを基本とした。文法については、現在学校教育において最も普通に行われている一般的な考え方によることとした。
- 五、現代、熟語として一般によく用いられる漢字約三二〇〇を選び、漢字見出し項目として、その漢字音・意味および熟語例を示した。
- 六、解説の助けとして、約二六〇〇の図版と約一二〇〇の図表を掲げた。
- 七、「季語」「敬語」「仮名」「漢字」「辞書」「国語施策」など、文字・語彙・国語などに関する重要項目、および「万葉集」「源氏物語」など古典文学の重要項目については、巻頭に二色刷りの「特別ページ」を設けて詳しく解説した。
- 八、検索の便を考慮し、人名には●、地名には◆のしるしを付した。
- 九、アルファベットや算用数字で表記される語の増える傾向を考慮し、「アルファベット・その他」としてまとめ、五十音の項目に続けて配置した。
- 十、巻末に、各品詞の活用表・主要助詞一覧、国語施策各文書「現代仮名遣い」「送り仮名の付け方」「ローマ字のつづり方」「外来語の表記」、また、「人名用漢字」、漢字・難読語一覧、和暦・西暦対照表、西暦・和暦対照表を収めた。

見出し

一、見出しの示し方

(1)見出しは原則として「現代仮名遣い」(昭和六一年七月内閣告示、平成二二年一

一月一部改正)の方式によって太字(ゴシック体)の仮名で示した。

(2)和語・漢語は平仮名、外来語は片仮名で示した。(あくまでその語の由来がどこにあるか、という語種の観点に立脚したものであり、慣用的にどう仮名表記されるかを示すことはしなかった。)

あおい^{ひめ}①【葵】 あいさい①【愛妻】 はなち①【鼻血】

みかづき①【三日月】 とんこう^{ちんく}【敦煌】 カッパ①^{ガボルト}【copa】

外来語は原則として「外来語の表記」(平成三年六月内閣告示)によって示し、長音を表すには「ー」を用いた。また、「ヴ」は用いず、「バ・ビ・ブ・ベ・ボ」を用いた。

ハープ①【harp】 バイオリン①【violin】 ヴェネチア【Venezia】

マージャン①【麻雀】【中国語】

(3)子見出しとなる見出しは、親見出しと重なる部分を「―」で省略した。(「見出しの配列」参照)

がっこう^{がう}①【学校】……。 ―い③【学校医】……。 ―きゅうしよく^{しき}⑤

【学校給食】……。 ―きょういくほう^{けうい}【学校教育法】……。

(4)子見出しとなる慣用句・ことわざなどの句項目は、行を改めて漢字仮名交じりの太字で示した。

あげく①【挙げ句・揚げ句】……。

挙げ句の果て

(5)その語に従えられる子見出しも含め、解説の行数の多い見出しは大きめの二行取り見出しとした。

あいさつ①【挨拶】……。

…………… ―ご①【挨拶語】……。

(6)アルファベットによる略語をはじめ、アルファベットや数字・記号を直接用いて表記されることが多い語は、五十音の項目の後に続けて横組みの「アルファベット・その他」を置き、そこで解説した。

ATM【automated-teller machine】……。(横組)

ただし、慣用的なつづり読みの読み方がある場合は、外来語に準じて片仮名で見出しを立て、配置したものもある。

アスキー①【ASCII】……。 ラン【LAN】……。

なお、検索の便をはかるため、アルファベットをそのまま読んだ場合の見出しを

示し、適宜解説のある見出しを↓のあとに[A]を付して示した。

ア—オー—セー⑤[AOC] ↓AOC A
アイ—シー—ユー⑤[ICU] ↓ICU A

二、語構成

(1) 見出し語の語構成は、語源をふまえてつづ現代の言語意識も考慮し、原則として二つの部分に分け、その間を少しあけて示した。

あん—ぜん⑩[安全] うえき①⑩[植木] なべ①[鍋]

(2) 人名は姓と名の間で分けた。また、地名は「山」「川」「海」などが接辞的に付くものはその前で分けたが、その他の地名や、年号・作品名などの固有名詞は原則として分けて示さなかった。

(3) 区分しがたいものや、区分が活用語の活用する部分の分け目を示す「・」や「。」と重なるものには示さなかった。

三、活用語の見出し

(1) 活用する語は原則として終止形を見出しとした。形容動詞は語幹を見出しとした。
(2) 口語形と文語形の両形があるものは原則として口語形で見出しを立て、見出しの下に文語形を示した。

おもな文語形は見出しとして立て、口語形が参照できるようにした。ただし、口語形と文語形が配列上並ぶ場合は、文語形見出しを立てなかった。

(3) 活用する語には、語幹と語尾の間に「・」を入れて示した。語幹・語尾の区別のできないものには示さなかった。

あおぐ②[仰ぐ] (動カ五「四」)

あさい①②[浅い] (形 図ク あさし

みる①[見る] (動マ上一) 図マ上一

あし②[足・脚] ……。

足を洗う

活用する連語および慣用句で、活用する部分が語幹・語尾の区別のできないものは、活用語の上に「。」を入れて示した。

あまぎらう①[天霧らふ] (連語)

い①[意] ……。

意に染ま。ない

(4) 可能動詞形の見出しは、原則として独立の見出しとして立てず、本項目の末尾に[可能]として、その語形を太字で示した。

たおす②[倒す] (動サ五「四」) ……。 [可能] たおせる

(5) 形容詞・形容動詞に接尾語「がる」「げ」「さ」「み」などの付いた派生語形は、原則として独立の見出しとして立てず、本項目の末尾に[派生]として語幹部分を

「」で省略して示した。

あつ①②[暑い] (形 図ク あつし ……。 [派生] —が：る (動ラ五「四」) —げ (形動) —さ (名)

しんせつ①[親切・深切] (名・形動 図ナリ ……。 [派生] —げ (形動) —さ (名) —み (名)

【歴史的仮名遣い】

(1) 歴史的仮名遣いが見出しの仮名遣いと異なるものについては、見出しのすぐ下に二行割りの平仮名で小さく示した。示し方は、見出しの語構成を目安とし、異なる部分については「」で示した。

おうぎ③[扇] おうせい④[王政]

(2) 子見出しの歴史的仮名遣いは、親見出しと重ならない部分について、見出しに準じて示した。なお、慣用句・ことわざなどの句項目には、歴史的仮名遣いを示さなかった。

ぎかい①[議会] ……。 —せいじ④[議会政治]

(3) 漢字表記が二種以上あつて歴史的仮名遣いが異なる場合は次のように示した。

いちおう④[一往]・う①[一応]

【表記欄】

一、見出し語に当てられる漢字を中心とする書き表し方を【】の中に示した。その際、国語審議会報告「同音の漢字による書きかえ」を参考に示した。二つ以上の表記法がある場合、より一般的と思われる順に「・」で区切り、併記した。

(1) 「常用漢字表」(昭和五十六年三月内閣告示、平成二十二年一月一部改正) および「人名用漢字別表」の漢字は、それぞれの漢字表で示される字体を用いた。「常用漢字表」ではいわゆる康熙字典体(旧字体)が(一)内に示され、「人名用漢字別表」の漢字も一部それを含むが、その字体は用いなかった。

とうだい④[灯台] りゅうこ①[竜虎] みぞう②[未曾有]

(2) 常用漢字とその音訓を表示した。

【】の中の漢字が「常用漢字表」にないものには「▽」、その漢字が「常用漢字表」にはあるが見出しに相当する音訓が示されていないものには「▽」を漢字の右肩に付した。また、「常用漢字表」の「付表」の語は《》で囲んで示した。

うこう④[烏合] おたけび②[雄叫び] かわせ③[為替]

さなえ①④[早苗]

ただし、地名・人名・作品名などのいわゆる固有名詞には「▽」「▽」を付さなかった。

あまのうずめのみこと【天鈿女命・天宇受売命】●

さらしなにつき【更級日記】 たじま【但馬】◆

(3) 送り仮名は「送り仮名の付け方」(昭和四八年六月内閣告示、平成二年一月一部改正)の通則に基づいて示した。

(7) 「常用漢字表」の音訓によるものは、省略の許容についてはその仮名を()で囲んで示し、多く送る許容については全体を()で囲んで示した。

きこえる【聞(こ)える】(動ア下 一) 図ヤ下二 きこ・ゆ

くもり【曇(り)】

あらわす【著(す)著わす】(動サ五【四】)

おこなう【行(う)行なう】(動ワ五【ハ四】)

(4) 「常用漢字表」にない漢字および音訓によるものには原則として許容を示さなかった。

かきならす【掻(き)鳴らす】(動サ五【四】)

みいだす【見(い)出だす】(動サ五【四】)

(5) 古語は歴史的仮名遣いで示し、送り仮名の許容は示さなかった。

おもいはず【思(ひ)出づ】(動タ下 一)

かいなず【掻(い)撫づ】(動タ下 一)

(4) いわゆる熟字訓の類は()で囲んで示した。

あおのり【青(海苔)】 あじさい【紫陽花】

さまよう【彷徨(う)】(動ワ五【ハ四】)

(5) 外来語と和語・漢語との複合した見出し語は、原則としてその外来語に相当する部分を「」で示した。ただし、国名の省略形や学術・専門用語などで一文字のものは省略しなかった。また、必要に応じてその複合語に相当する原語のローマ字綴りを示した。

エーゲかい【海】◆【Aegean Sea】

ローマ字・数字などで慣用として書かれるものは、それを示した。

エーゴはん【A5判】

(6) 近代中国語などで、一般に漢字を用いるものについては【】の中に示した。この場合「ゝ」「ゎ」は付さなかった。

ギョーザ【餃子】(中国語)

マーボー豆腐【麻婆豆腐】(マーボーは中国語)

二、外来語については、『』の中に、日本に直接伝来したと考えられる原語を掲げ、その言語名・国籍を注記した。ギリシヤ語・ペルシヤ語・ロシア語などは適宜ローマ字綴りに直して掲げた。また、原則として英語は国籍の注記を省略した。ただし、複数の国籍を注記するような場合は、他の国籍注記と区別するために、「英」

と記すことも適宜行なった。

ガーゼ【ゲイズGaze】 カルタ【ガボルトcarta】 カーテン【カウタインcurtain】

グラム【グラムgramme; 英 gram】

(1) 地名・人名などの固有名詞には原則として国籍を示さず、解説文中で理解できるようにした。

(2) 原語音からいちじるしく転訛した外来語や、外国語に擬して日本で作られた片仮名の語などは「」の中にその語源などを示した。

パンク【パンチャーpuncture】 ナイター【ナイトnight+er】

(3) 外来語のうち、かつては漢字を当てて書くことが多かったり、現在でも漢字で書く場合がある語には、その旨を「」の中に補説として示した。

アイルランド【アイルランドIreland】……【愛蘭】とも当てた】

インチ【インチinch】……【吋】とも書く】

【品詞・活用】

見出し語の品詞・活用等の表示は、見出しの下に略語をもって()内に示した。

(略語・記号一覧参照)

(1) 名詞には原則として品詞の表示を省略した。ただし、同一項目で、名詞とそれ以外の品詞の用法とがある場合は名詞用法を(名)と示した。

あじ【アジ味】■(名) …… ■(形動) 図ナリ ……。

かちき【カチキ勝(ち)気】(名・形動) 図ナリ

(2) 動詞には活用の種類、活用の行を示し、文語形容詞・文語形容動詞には活用の種類を示した。

あきなう【アキナウ商(う)】(動ワ五【ハ四】)

あざらけ【アザラケ鮮(けし)】(形ク)

つきづき【ツキヅキ付き付きし】(形シク)

おだい【オダイ穩(ひ)】(形動ナリ)

せいせい【セイセイ凄(凄)】(形動タリ)

(3) 活用語で、口語形と文語形のあるものは、口語形の見出しの品詞欄の下に図として文語形を示した。ただし、口語・文語同形の場合は文語形を省略した。

あける【アケル明(け)る・空(け)る・開(け)る】(動カ下 一) 図カ下二 あく

あら【アラい】(形) 図ク あら・し

いる【イル射(る)】(動ア上 一) 図ヤ上 一

おだやか【オダヤカ穩(やか)】(形動) 図ナリ

(4) 「する」が付いてサ変動詞としても用いられるものは(名)スル、(副)スルなどの形で示した。

- だんてい【断定】(名)スル
しっかり【確り、駢り】(副)スル
(5)文語形容動詞タリ活用に相当する口語で、「一と」(副詞)、「一たる」(連体詞)として用いられるものは(タル)の形で示した。
とうとう【たうたう】滔々【タル】図形動タリ
(6)主な助動詞については、語釈の前に活用変化を示した。
(7)連語は、(連語)と示した。連語の子見出しには(連語)表示を省略した。

【見出しの配列】

一、配列は五十音順とした。外来語の長音符「ー」は、直前の仮名の母音にあたる仮名と同じ扱いとした。

- コール【call】(タ)スル
こおる【こほ】凍る・氷る【(動)五【四】】
ゴール【goal】(名)スル
ほおる【ほ】放る【(動)五【四】】
ホール【hole】
ほおん【ほん】保温【(名)スル】
(1)清音・濁音・半濁音の順とした。

- はい【ひ】灰
ばい【倍】
パイ【pi・ii・π】
(2)促音【ん】・拗音【ゃ・ゅ・ょ】を先に、直音をあとにした。
いっか【い】一家
きやく【客】
いつか【い】五日
きやく【規約】

二、見出しの仮名が同じ場合は、順次、次の基準で配列した。

- (1)品詞の順。
名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・連体詞・副詞・接統詞・感動詞・助動詞・助詞・接頭語・接尾語・連語・枕詞の順に配列した。
同じ見出し仮名の動詞は次の活用の順に配列した。
五段・四段・上一段・上二段・下一段・下二段・カ変・サ変・ナ変・ラ変・特別活用
(2)和語・漢語・外来語の順。
(3)普通名詞・固有名詞の順。
地名・人名・作品名などの固有名詞は、普通名詞の後方に配列した。同音・同表記の普通名詞がある場合は、見出しを併せず別に見出しを立て、その普通名詞の直後に置いた。
(4)語構成のないものが先で、以下順次一字目のあとにあるもの、二字目のあとにあるものの順とした。

- (5)漢字表記のないものが先、漢字表記のあるものがあと。
(6)漢字表記のあるものは、一字目の画数が少ないものが先。同画数の場合は康熙字典の順。一字目が同字ならば二字目の画数の少ない順とした。一部の漢字およびその構成要素の画数の考え方は巻末付録「漢字・難読語一覧」8ページの「3 検索の便をはかるための数え方」に従った。
(7)ローマ字綴りの外来語は、アルファベット順とした。
(8)漢字見出し項目は、同音語の最後の位置に配列した。
三、親見出しと子見出し

複合語は、語構成上の最初の部分が見出しとして掲げられている場合は、それを親見出しとし、複合語を子見出しとして、五十音順に追い込んでまとめた。ただし、(2)以下の例外を一部設けた。

- (1)親見出しは原則として見出しの仮名が三字以上(促音・拗音などの小書き仮名も字数に算入)からなる語に限った。

あぶら【油・脂・膏】……。―あけ【油揚げ】……。―あし【脂足】……。―あせ【脂汗・膏汗】……。

えど【江戸】
えどじょう【江戸城】

- (2)見出しの仮名が三字以上でも、以下のものは親見出しとしなかった。①漢字一字の字音語 ②アルファベット一字の見出し語 ③「おもい思」「こころ(心)」「こくさい(国際)」「にほん(日本)」「にじゅう(二十)」「さんじゅう(三十)」など、複合語の多いもの。これらの語が上に付く複合語は独立の見出しとした。

しょう【商】
しょうばい【商売】(名)スル
アール【R・r】
アールアンドディー【R&D】

おもい【思】
おもいあう【思ひ合う】(動)五【ハ四】

- (3)動詞・形容詞は、独立の見出しとした。

こおり【氷・凍り】……。―あずき【小豆】……。
こおりつく【凍り付く】(動)カ五【四】

- (4)地名・人名・作品名などの固有名詞は、同音・同表記の語があっても、原則として独立の見出しとした。固有名詞を冠した複合語は、(1)に準じてその固有名詞を親見出しとしてまとめた。

あいづ【会津】……。―ぬり【会津塗】……。―ばんだいさん【会津磐梯山】……。―やき【会津焼】……。―わかまつ【会津若松】……。

(5) 日本人名は姓の見出しを立て、姓の見出し仮名が二字以下でも、姓を親見出しとして追い込んだ。ただし、ペンネームなどの架空の姓は、原則として立てなかった。

もり【森】姓氏の一。――ありのり【森有礼】……。――おうがい【森鷗外】
(6) 慣用句・ことわざなどの句項目は、先頭部分の見出しの後ろに、行を改めて五十音順に配列した。

うま【馬】……。

馬が合：う

馬の背を分：ける

馬の耳に念仏

四、アルファベットを用いて書かれる、AOC・ICUなどの略語や「CTスキャナ―」「eスポーツ」などのアルファベットからはじまる語は、「アルファベット・その他」に配列をし、解説もそこで行なった。

【解説】

一、語義解説

(1) 意味の記述順序は次のようにした。

(ア) 現代語として用いられている意味・用法を先にし、古語としての意味・用法をあとに記述した。

(イ) 現代語は一般的な語義を先にし、特殊な語義や専門的な語義をあとに記述した。
(ウ) 古語は、原義を先にし、その転義を順を追って記述した。

(2) 語義区分

語義・用法を分ける場合、次の区分記号を用いた。

(ア) 一般には①②③…を用いた。

(イ) 品詞・活用が異なる場合は■□△…を用いた。

いっこく【④①】(名)……。■(名・形動)図ナリ……。

うらむ【②】(恨む・怨む)■(動マ五【四】)……。■(動マ上【一】)……。

(ウ) 語義・用法などが大きく異なる場合は□△…を用いた。

あける【①】(明ける・空ける・開ける)(動カ下【一】)図カ下二あく□(他動詞)……。

□(自動詞)……。

ほうりつ【①】(法律)□(歴史的仮名遣い「はふりつ」)……。■(歴史的仮名遣い「はふりつ」)……。

(ア) ①②…を大きくまとめる場合は①②…を用いた。

(イ) ①②…をさらに細かく分ける場合は⑦⑧⑨…を用いた。

(3) 解説の冒頭に、必要に応じ、語源・語誌、翻訳語の語源、用法、清濁、位相、字

音の種類、表記情報などを「」で囲んで記した。さらに詳述する場合は補説欄として解説末尾に「」で囲んで記した。

(4) 専門用語にはその分野を明らかにするため、必要に応じて『』で囲んで分野名を示した。(「略語・記号一覧」参照)

(5) 二つ以上の漢字表記がある語で、語義によって用い方が異なる場合は語義解説のあとに※で囲んで示した。

かく【①】(書く・描く・画く)(動カ五【四】)①……。⑦……。《書》①……。

《描・画》②……。《書》

(6) おもな動詞には、同訓の漢字表記の使い分けについて、[表記]という記号の下に解説した。

(7) 二―三語の同音の語で、その使い分けがむずかしい語には、補説欄で使い分けを解説した。

(8) 二―三語の間で類義関係があり、その使い分けがむずかしい語には、補説欄で使い分けを解説した。

(9) おもな動詞・形容詞には、慣用句として特別の意味で用いられるものを(慣用)という記号の下に示した。

(10) 対義語は↑を用いて示した。対義語が二つ以上の語義区分に共通する場合は▽でまとめて示した。

(11) 参照項目は↓で示した。

(12) 解説をすべて他の見出しで行なった場合は、その見出しを↓のあとに示した。

(13) 別の語形や同義語がある場合は、解説末尾に示した。

(14) 季語として用いられるものは[季]新年のように、[季]のあとに新年・春・夏・秋・冬を示した。また、句例を《》の中に示した。

(15) 歌枕とされているものは《歌枕》と示した。

(16) 人名は、解説の冒頭に生没年を記した。

(17) 中国の現代地名・現代人名には、原則として原語の音に近い形を片仮名で解説末尾に示した。

(18) 外国の作品名には、その原題を示した。

二、本文の表記

(1) 解説の本文は、平易を旨とし、おおむね「常用漢字表」「現代仮名遣い」「送り仮名の付け方」に従って記した。

(2) 漢字の字体は、「常用漢字表」ならびに「人名用漢字別表」のいわゆる新字体を用い、他はなるべく一般に通用している字体を用いた。

(3) 動植物名・化学物質名などは適宜片仮名を用いた。

【用例】

- 一、見出し語の語義・用法を具体的に示し、また典拠などを示すために、国語項目を中心に、用例を語釈のあとに「」で囲んで示した。
- (1) 現代語には作例を掲げた。ただし今日ではやや特殊な語義・用法などについては明治以降の文献からの引用例を適宜掲げた。
- (2) 古語には古典からの引用例を掲げた。初出例にこだわらず、語釈・用法の理解の助けとなるものを掲げた。
- (3) 見出し語に相当する部分は「」で略した。
- 活用語の場合は語幹部分を「」で表し「・」を付けて活用語尾を送った。語幹と語尾の区別ができない語は「」で略さず太字で示した。
- かいちゅう^い【懐中】(名)スル ①……。「」をさぐる」――して来た翻訳物を取出し「浮雲四迷」②……。「人の――を抜くのがスリで」吾輩は猫である漱石
- かくす^②【隠す】(動)サ五【四】 ①……。「雲が日を――す」身を――す」②……。「能ある鷹は爪を――す」困惑の色を――さない」
- する^①【為る】(動)サ変【図】サ変す ①……。「勉強をする」②……。「昔、高校の教師をしていたとき」③……。
- 連語・慣用句で、活用する部分が語幹・語尾の区別のできないものは、活用する部分の前までを「――」で略し、そのあとに活用する部分を送った。
- みみ^②【耳】……。
- 耳にする……。「変なうわさを――した」
- 二、引用例文・出典の示し方
- (1) 引用文献のうち古典の書名は多く略称を用い、主要な作品には巻名・章段名・部立てなどを小字で付記した。また、近代の書名は原則として全形を示し、作者名を略して小字で付記した。(「出典略称等一覧」参照)
- いぬる【往ぬる・去ぬる】(連体) ……。「――十余日のほどより」源若菜
- おおみかど^{みかど}【大・御門】……。「――はさしつや枕」七九
- かんきやく^{かん}【閑却】(名)スル ……。「生と死との最大問題を――する」虞美人草漱石
- (2) 古典の用例は歴史的仮名遣いによって示した。読みやすさを考慮し、原典の仮名を漢字に改め、句読点・濁点を補うなどしたため、必ずしも原典のままではない。なお、読み仮名は現代仮名遣いで付した。
- 近代の用例は原則として原典のままとした。
- (3) 用例中、語句の一部を省略した場合は「――」で示した。また、必要に応じ、語句の注釈を(――)で囲んで片仮名で示した。

- (4) 「日葡辞書」「ヘボン」(和英語林集成)などのローマ字書きは片仮名でうつした。えつよ【悦予】……。「――ライダク」日葡

- (5) 古辞書などに典拠のあるものについては、「」の中に文献名のみを示した。

- あぎ【顎・鰓】①うわあご。「和名抄」②魚のえら。「新撰字鏡」

- (6) 万葉集は「国歌大観番号」(旧)で示した。また、日本書紀・古事記などの訓・訓注の部分はその旨を示した。

- あきつかみ【現つ神】……。「――吾が皇^{みまろ}の天の下」万^{マン}一〇五〇

- おごし【厳し】(形)シク ……。「三百の――しき大徳^{だいとく}等」紀持統訓

【漢字見出し項目】

- (1) 熟語として一般によく用いられる漢字(造語成分としての漢字)を、その漢字の代表字音で配列し、解説した。たとえば、「あ」という代表字音をもつ漢字を、その代表字音「あ」の二行取りのタイトルのもとに示してある。同音の漢字中の配列は画数順・康熙字典の部首順によった。

あ

- 【亜(亞)】……。

- 【阿】……。

- (2) 漢字見出し項目の配列は同音語の最後とし、上部の太い罫線で区別して示した。

- (3) 常用漢字表に示されているいわゆる康熙字典体は(――)に入れて示し、許容字体は「」に入れて示した。

- 【温(溫)】

- 【餌(餌)】

- (4) 解説中では、その漢字の一般的な字音をそれぞれ、漢音・呉音・唐音・慣用音の区別をして示すとともに、その意味・熟語例を示した。

- 【蛙】^アフツ^ツカ^カエ^エル。「蛙声・井蛙^{せい}」

- 【払(拂)】^フツ^ツカ^カエ^エル。「はらいのける」払晝・払拭^{ふき}・払底・払子^{すし}」
- (5) 熟語例は、その漢字が語頭にくるものを先に示し、複数示す場合は、五十音順とした。

【その他】

- (1) 枕詞は見出しの下に(枕詞)として示した。

- (2) 人名の見出しのうち、日本人名については物故者に限った。

- (3) 解説文中の年号については西暦紀元を用いた。解説の中で同世紀の四桁の年が二つ以上あらわれる場合は、世紀を示す最初の二桁の数字を省いた。

【アクセント】

(1) 見出し語のうち、現代語および現代でも使用されることのある語にアクセントを示した。ただし、方言、古語、人名・地名・作品名などのいわゆる固有名詞、仏教その他専門分野の特殊な用語、歴史的用語、個別の法律名および付属語・連語などには原則として示さなかった。また、二語以上の要素から成る語で一語化の度合が薄く、それぞれの構成要素のアクセントから類推できると思われる語にも示さなかったものが多い。

(2) 本辞典で示したアクセントは、現在テレビ・ラジオなどで用いられている全国共通語のアクセントである。

(3) アクセントは単語ごとに、高く発音される部分から低く発音される部分へ移る境目の音が何番目の音であるかを①②③…によって示した。低くならない語は④のみを示した。また「十人十色」(ジューニン・トイロ) (傍線の部分を高く発音する) などのように、一つの見出し語に二つのアクセントの単位を含むものは①ー①のように示した。

《日本語のアクセントの型》

日本語のアクセントは、単語を発音するときに、その単語の中の個々の「拍」を高く発音するか低く発音するかによって決まる。「拍」というのは日本語の音の長さの単位で、下図の例でいえば、カタカナが一字で「拍」、「シヤ・チュ・キヨ」などの拗音は二字で一拍である。現在、東京の言葉を基盤として日本全国で共通に使われている「全国共通語」では、アクセントの種類は、語の拍数によって決まっている。

アクセントの種類は大きく「平板式」と「起伏式」とに分けられる。下図で◎を含むものが起伏式、含まないものが平板式である。●と◎がその語に含まれる個々の拍、○はその語に続いて発音される助詞などである。

共通語ではすべての単語において、一拍目と二拍目との間に音の高低の変化がある。

平板式は、二拍目で高くなったあと、高低の変化がなく、アクセントは一種類だけである。起伏式は、◎の直後で音が低くなり、以下に続く部分には音の高低の変化がない。起伏式をさらに細かく分けるときは、①を「頭高型」といい、二拍語の②、三拍語の③など、単語の最後の拍に◎があるものを「尾高型」、その他の起伏式のアクセントを「中高型」という。

動詞・形容詞など「活用のある語」は、活用形によってアクセントが変わる。文節の形や活用形のとときのアクセントは、次ページの例を参照されたい。

図 日本語のアクセントの型

	平 板 式		起 伏 式				
			頭高型	中高型・尾高型 ()			
	④	①	②	③	④	⑤	⑥
一拍語	 ナ 名	 キ 木					
二拍語	 ミズ 水	 アキ 秋	 ハナ 花				
三拍語	 カイシヤ 会社	 デンキ 電気	 オカシ お菓子	 オトコ 男			
四拍語	 タイガク 大学	 ブンガク 文学	 ユキグニ 雪国	 サイジキ 歳時記	 オトオト 弟		
五拍語	 チュウゴクゴ 中国語	 シヤベツト シャーベツト	 フクウリツ 普及率	 ヤマノボリ 山登り	 コガタバス 小型バス	 モモノハナ 桃の花	
六拍語	 ケンブツニン 見物人	 ケンモホロロ けんもほろろ	 オマワリサン お巡りさん	 キンコンシキ 金婚式	 コクゴジテン 国語辞典	 タンサンガス 炭酸ガス	 ジュウイチガツ 十一月

④ 平板式：二拍目で高くなってから高低の変化がない

① 起伏式・頭高型：一拍目だけ高く、あとは低い

② 起伏式・中高(尾高)型：二拍目だけ高く、あとは低い

③ 起伏式・中高(尾高)型：二～三拍目が高く、あとは低い

④ 起伏式・中高(尾高)型：二～四拍目が高く、あとは低い

⑤ 起伏式・中高(尾高)型：二～五拍目が高く、あとは低い

⑥ 起伏式・中高(尾高)型：二～六拍目が高く、あとは低い

【文節・活用形のアクセント例】

・本辞典では、現代語のほとんどの項目にアクセントを示してある。しかし、実際に発音されるときは、助詞・助動詞や接辞を伴ったり、活用形であったりすることが多い。ここには文節の形や活用形の場合のアクセントのおもな例を掲げた。傍線は高く発音する部分であり、「」のところで下がることを示す。

平板式名詞「みず〔水〕」

ミズサエ 水さえ
ミズシカ 水しか
ミズスラ 水すら
ミズダ 水だ
ミズダソーダ 水だそうだ
ミズダロー 水だろう
ミズデシヨ 水でしよう
ミズデス 水です
ミズデワ 水では
ミズナド 水など
ミズニワ 水には
ミズノ 水の
ミズバカリ 水ばかり
ミズマデ 水まで
ミズヨリ 水より

起伏式名詞「よる〔夜〕」

ヨルサエ 夜さえ
ヨルシカ 夜しか
ヨルスラ 夜すら
ヨルダ 夜だ
ヨルダソーダ 夜だそうだ
ヨルダロー 夜だろう
ヨルデシヨ 夜でしよう
ヨルデス 夜です
ヨルデワ 夜では
ヨルナド 夜など
ヨルニハ 夜には
ヨルノ 夜の
ヨルバカリ 夜ばかり
ヨルマデ 夜まで

ヨルヨリ 夜より

平板式動詞「くらべる〔比べる〕」

クラベ(クラベ) 比べ(連用形)
クラベサセル 比べさせる
クラベズライ 比べづらい
クラベタ 比べた
クラベタリ 比べたい
クラベタリ 比べたり
クラベデ 比べて
クラベナイ 比べない
クラベナガラ 比べながら
クラベニクイ 比べにくい
クラベマス 比べます
クラベヨ 比べよう
クラベヨリ 比べよう
クラベラレル 比べられる
クラベル 比べる(終止形・連体形)
クラベルカラ 比べるから
クラベルケレド 比べるけれど
クラベルソーダ 比べるそうだ
クラベルダロー 比べるだろう
クラベルデシヨ 比べるでしよう
クラベルナ 比べるな(禁止)
クラベルノデ 比べるので
クラベルホド 比べるほど
クラベルヨード 比べるようだ
クラベルラシイ 比べるらしい
クラベレバ 比べれば
クラベロ 比べろ
クラベワ 比べは(しない)

起伏式動詞「しらべる〔調べる〕」

シラベ 調べ(連用形)
シラベサセル 調べさせる
シラベズライ 調べづらい
シラベタ 調べた
シラベタイ 調べたい
シラベタリ 調べたり
シラベテ 調べて
シラベナイ 調べない

シラベナガラ 調べながら
シラベニクイ 調べにくい
シラベマス 調べます
シラベヨ(シラベヨ) 調べよう
シラベヨリ 調べよう
シラベラレル 調べられる
シラベル 調べる(終止形・連体形)
シラベルカラ 調べるから
シラベルケレド 調べるけれど
シラベルソーダ 調べるそうだ
シラベルダロー 調べるだろう
シラベルデシヨ 調べるでしよう
シラベルナ 調べるな(禁止)
シラベルノデ 調べるので
シラベルホド 調べるほど
シラベルヨード 調べるようだ
シラベルラシイ 調べるらしい
シラベレバ 調べれば
シラベロ 調べろ
シラベワ 調べは(しない)

平板式形容詞「つめたい〔冷たい〕」

ツメタイ 冷たい(終止形・連体形)
ツメタイカラ 冷たいから
ツメタイケレド 冷たいけれど
ツメタイシ 冷たいし
ツメタイソーダ 冷たいそうだ
ツメタイダロー 冷たいだろう
ツメタイデシヨ 冷たいでしよう
ツメタイデス 冷たいです
ツメタイト 冷たいと
ツメタイナ 冷たいな
ツメタイノ 冷たいの
ツメタイノデ 冷たいので
ツメタイバカリ 冷たいばかり
ツメタイホド 冷たいほど
ツメタイヤラ 冷たいやら
ツメタイヨード 冷たいようだ
ツメタイラシイ 冷たいらしい
ツメタカッタ 冷たかった
ツメタガル 冷たがる

起伏式形容詞「うれしい〔嬉しい〕」

ウレシイ 嬉しい(終止形・連体形)
ウレシイカラ 嬉しいから
ウレシイケレド 嬉しいけれど
ウレシイシ 嬉しいし
ウレシソーダ 嬉しいそうだ
ウレシダロー 嬉しいだろう
ウレシデシヨ 嬉しいでしよう
ウレシデス 嬉しいです
ウレシート 嬉しいと
ウレシナ 嬉しいな
ウレシノ 嬉しいの
ウレシノデ 嬉しいので
ウレシバカリ 嬉しいばかり
ウレシホド 嬉しいほど
ウレシヤラ 嬉しいやら
ウレシヨード 嬉しいようだ
ウレシラシイ 嬉しいらしい
ウレシカッタ 嬉しかった
ウレシガル 嬉しがる
ウレシカロー 嬉しからう
ウレシク 嬉しく(連用形)
ウレシクテ 嬉しくて
ウレシクナイ 嬉しくない
ウレシクワ 嬉しくは
ウレシゲ 嬉しげ
ウレシケレバ 嬉しければ
ウレシサ 嬉しさ
ウレシソーダ 嬉しそうだ

【出典略称等一覧】

【近代作品】

・用例中の書名の直後に小書きで示した作者名を五十音順に配し、姓を併せて掲げ、続けて用例に用いた主な作品を掲げた。

愛山(山地愛山いまだん) 現代日本教会史論
晶子(与謝野晶子よしかぎ) 一隅より みだれ髪
曙(木村曙きむら) 婦女の鑑
敦(中島敦あだち) 山月記 弟子 李陵より
周(西周しゅう) 万国公法 百一新論 百学連環
一葉(樋口一葉ひがくち) うもれ木 大つこもり
経つくえ 十三夜 たけくらべ にこりえ
花こもり 暗夜 ゆく雲 わかれ道
われから

稲舟(田沢稲舟いざねふね) 五太室
岩五郎(松原岩五郎いわたろう) 最暗黒の東京
卯吉田口卯吉(うつき) 日本開化小史
鳥水小島鳥水(とりみづ) 日本北アルプス縦断記
枝盛(植木枝盛うゑもも) 民権自由論
円朝(二遊亭円朝ふたうし) 塩原多助一代記
真景(森鷗外まうけ) 怪談牡丹灯籠
鷗外(森鷗外まうけ) 阿部一族 伊沢蘭軒

サタ・セクスアリス うたかたの記
大塩平八郎 興津弥五右衛門の遺書 灰燼
霞亭(生涯の末一年) かのやうに 雁が
寒山拾得 魚玄機 懇親会 サフラン
寿阿弥の手紙 山椒大夫 洪江抽斎 青年
即興詩人 そめちがへ 高瀬舟 独身 鶏
羽鳥千尋(はるち) 花子 半日 百物語 文づかひ
冬の王 北条霞亭 舞姫 妄想 安井夫人

桜洲(中井桜洲なかいさくら) 航海新説 漫遊記程
桜痴(福地桜痴ふくち) もしや草紙
乙羽(大橋乙羽おほはし) 千山万水 続千山万水
露小袖
お室(嵯峨の屋お室さやま) 姉と弟 薄命のすず子

初恋
薫(小山内薫おのゝ) 大川端
花袋(田山花袋たなか) 田舎教師 重右衛門の最後
春潮(あきうし) 生 日光山の奥 野の花 描写論
蒲団
かの子(岡本かの子) 河明り 老妓抄

出典略称等一覧 一五

荷風(永井荷風ながい) 麻布樓記 ちぢさゝ

あめりか物語 異郷の恋 腕くらべ

江戸芸術論 おかめ笹 踊子 おぼろ夜

書かでもの記 かし間の女 荷風隨筆

荷風文庫 欽楽 金草山人戯文集

草薨(い)漫筆 勲章 紅茶の後 西遊日誌抄

地獄の花 下谷叢話 小説作法

新婦朝者日記 新橋夜話 すみだ川

断腸亭雜業 断腸亭日乗 つゆのあとさき

問はずがたり 夏すがた ひかげの花

日和下駄 深川の唄 二人妻 浮沈

ふらんす物語 濯染綺譚 毎月見聞録

野心 夢 夢の女 来訪者 冷笑 わくら葉

寛(池田寛) 恩讐の彼方に 俊寛

忠直卿(忠直卿) 浮世記

勘助(中勘助) 銀の匙

鑑三(内村鑑三) 求安録 基督信徒の慰め

墮落の教義 何故に大文学は出さる乎

非戦論の原理

幾多郎(西田幾多郎) 善の研究

喜美子(小金井喜美子) 浴泉記

泣重(薄田泣重) 二十五絃

久弥(深田久弥) わが愛する山々

鏡花(泉鏡花いづみ) 浅茅生 尼ヶ紅 霞ふる

活人形 伊勢之巻 一之巻 色磨 印度更紗

歌行灯 絵日傘 髪指の草紙 薔花怪談

鬼の角 女肩衣 女客 婦系図

海異記 杜若文 葛飾砂子 冠左衛門

義血俠心 起誓文 黒帯記 銀短冊 金時計

草迷宮 国自來がく 黒猫 黒百合

軍事通信員 外科室 化鳥 玄武朱雀

大野聖 桜心中 さらさら越 参宮日記 山僧

式部小路 春昼 春昼後刻 鐘声夜半録 白鷺

白金之絵図 続紅雪録 続風流録 袖屏風

辰巳巻 註文帳 爪ひき 通夜物語

照葉の狂言 なもとお桜 南地心中 二世の契

日本橋 沼夫 萩薄内証話 化銀杏

八万六千四百回 秘恋伝 貧民俱樂部 風流線

無愛樹 夜行巡査 大和心 湯島詣 妖術

妖僧記 環瑠品 楊柳歌 夜釣 予備兵

乱菊 竜潭 電象

虚子(高浜虚子) 杏の落ちる音 斑鳩物語

大内旅宿 三畳と四畳半 続風流儀

俳諧師 風流儀

欽堂(戸田欽堂) 情海波瀾

国男(柳田国男) 遠野物語

邦武(久米邦武) 米欧回覧実記

景一(川井景一) 横濱新誌

桂月(大町桂月) 十和田湖

啓五郎(岡部啓五郎) 開化評林

謙澄(末松謙澄) 谷間の姫百合

浩二(宇野浩二) 蔵の中 子を食し屋

香水(菊亭香水) 世路日記

草村(養庭草村) 当世商人気質

紅葉(尾崎紅葉) 青葡萄 安知歌 猊林

色懺悔 不言不語 浮木丸 巴波川

江戸水 男ごころ おぼろ舟 女の顔

関東五郎 伽羅枕 紅白毒饅頭

恋のぬけがら 恋山腰 心の闇 此ぬし

金色夜叉 三人妻 新色懺悔 末黒の薄

袖時雨 多情多恨 鉄面皮 隣りの女 夏瘦

二人女房 二人むく助 枯華微笑 風雅娘

風流京人形 文ながし 紅懷紙 裸美人

むき玉子 冷熱

採菊(糸野採菊) 近世紀聞(初編)

小波(巖谷小波) 抒情小曲集

左千夫(伊藤左千夫) 野菊之墓

早苗(高田早苗) 春恋綺話

実篤(武者小路実篤) おめでたき人

三郎(島田三郎) 条約改正論

散士(東海散士) 佳人之奇遇

思案(石橋思案) 乙女心

子規(正岡子規) 仰臥漫録

網案(書屋俳諧) 俳人無村 病牀の苦言

重昌(志賀重昌) 日本風景論

思軒(森田思軒) 探偵小曲集

治助(高須治助) 花心蝶思録

賤子(若松賤子) 小公子

四迷(二葉亭四迷) あひびき 浮雲 片恋

奇遇 肖像画 其面影 平凡 めぐりあひ

夢かたり

秋江(近松秋江) 青草 疑惑 執着

別れたる妻に送る手紙

秋声(徳田秋声) あらくれ 新世帯

徳田 爛

純一郎(谷崎純一郎) 花柳春話

潤一郎(谷崎潤一郎) あくび 悪魔 蘆刈

鍵 きのうけふ 麒麟 少将滋幹の母 少年

残虐記 刺青 春琴抄 疎閑日記 夢喰ふ虫

痴人の愛 東京をおもふ 人魚の嘆き 秘密

猫と庄造と一人のをんな 母を恋ふる記

文章読本 狂言時代 法成寺物語

盲目物語 幼少時代 乱菊物語

春葉(柳川春葉) 錦木

湘煙(中島湘煙) 同胞姉妹に告ぐ

追憶(坪内逍遙) 概世土伝 桐一葉

自由太刀余波鋭鋒 春恋綺話

春風情話 小説神髓 当世書生気質

神史家略伝并に批評 杏手鳥孤城落月

未来の夢

鋤雲(栗本鋤雲) 抱菴殘遺稿 抱菴十種

如燕(桃川如燕) 百猫伝

紫瀾(坂崎紫瀾) 汗血千里の駒

次郎(阿部次郎) 三太郎の日記

輔清(青木輔清) 万国奇談

青果(真山青果) 家鴨飼

雪嶺(三宅雪嶺) 偽悪醜日本人 真善美日本人

漱石(夏目漱石) イズムの功過 永日小品

思ひ出す事など カイライル博物館

薙露行 硝子戸の中 草枕

虞美人草 三人 坑夫 こころ

琴のそら音 三十四郎 自転車日記 趣味の遺伝

小説「エイルキン」の批評 それから

中味と形式 二十文の野分 彼岸過迄

文学評論 文学論 文芸の哲学的基礎 文鳥

坊っちゃん 幻影の盾 道草 明暗 門

夢十夜 倫敦の消息 倫敦塔

吾輩は猫である

草平(森田草平) 煤煙

蘇峰(徳富蘇峰) インスピレーション

社会に於ける思想の三潮流 天地悠々

天然と同化せよ! 幽寂

桜陰比事	本朝桜陰比事
置土産	西鶴置土産
親仁形氣	浮世親仁形氣
織留	西鶴織留
銀持氣質	西世銀持氣質
近代艶隠者	近代艶隠者
禁短氣	傾城禁短氣
好色盛衰記	世間侍婢氣質
侍婢氣質	御前義経記
五人女	好色五人女
三代男	好色二代男
芝居氣質	当世芝居氣質
姑氣質	世間姑氣質
諸艶大鑑	西鶴諸艶大鑑
諸国はなし	諸国はなし
諸道聴耳世間猿	諸道聴耳世間猿
新永代蔵	日本新永代蔵
新可笑記	新可笑記
新色五巻書	新色五巻書
俗つれつれ	西鶴俗つれつれ
旦那氣質	世間旦那氣質
長者容気	世間長者容気
変形氣	世間変形氣
手代氣質	世間手代氣質
名残の友	西鶴名残の友
名代紙衣	御伽名代紙衣
男色大鑑	男色大鑑
二十不孝	本朝二十不孝
化物氣質	世間化物氣質
母親容気	世間母親容気
風流曲三味線	風流曲三味線
武家義理物語	武家義理物語
武道伝来記	武道伝来記
懷祝	懷祝
文反古	万の文反古
三島曆	傾城三島曆
三所世帯	色里三所世帯
子息氣質	世間子息氣質
娘容気	世間娘容気
胸算用	世間胸算用
宛久一世	宛久一世の物語
宛久二世	宛久二世の物語
右京大夫集	右京大夫集
宇治拾遺	宇治拾遺物語
鴉衣	鴉衣
宇津保	宇津保物語
出典略稱等一覽	出典略稱等一覽

運歩色葉集	運歩色葉集
栄花	栄花物語
永久百首	永久百首
惠慶集	惠慶集
大子集	大子集
延喜式	延喜式
宴曲集	宴曲集
おあむ物語	おあむ物語
笈の小文	笈の小文
住生要集	住生要集
大堤河行幸和歌序	大堤河行幸和歌序
大鏡	大鏡
大句数	大句数
大上臈御名之事	大上臈御名之事
大矢数	大矢数
奥の細道	奥の細道
落窪	落窪
御湯殿上	御湯殿上
おらが春	おらが春
折たく柴の記	折たく柴の記
飯・II 飯名草子	飯・II 飯名草子
伊曾保物語	伊曾保物語
薄雪物語	薄雪物語
竹竈	竹竈
仁勢物語	仁勢物語
海道記	海道記
懷風藻	懷風藻
下学集	下学集
花鏡	花鏡
神楽歌	神楽歌
蜻蛉	蜻蛉
鹿島紀行	鹿島紀行
賀茂翁集	賀茂翁集
加茂女集	加茂女集
唐物語	唐物語
閑吟集	閑吟集
菅家後集	菅家後集
菅家文集	菅家文集
閑田詠草	閑田詠草
寛平后宮歌合	寛平后宮歌合
看聞御記	看聞御記
伎・II 歌舞伎	伎・II 歌舞伎
青砥稿	青砥稿
浅間嶽	浅間嶽
吾嬬鑑	吾嬬鑑
阿弥陀が池	阿弥陀が池
網模様	網模様
阿波の鳴門	阿波の鳴門
伊勢首頭	伊勢首頭
伊勢平氏	伊勢平氏
因幡小僧	因幡小僧
入間詞	入間詞
浮世柄	浮世柄
宇都谷峠	宇都谷峠
阿国御前	阿国御前
幼稚子敵討	幼稚子敵討
お染久松色説	お染久松色説
加賀萬	加賀萬
籠釣瓶	籠釣瓶
唐崎八景	唐崎八景
韓人漢文	韓人漢文
勸進帳	勸進帳
吉祥天女	吉祥天女
吉備大臣	吉備大臣
金竜橋	金竜橋
天衣粉	天衣粉
桑名屋徳蔵	桑名屋徳蔵
毛拔	毛拔
黄門記	黄門記
金種目	金種目
小袖曾我	小袖曾我
五大刀	五大刀
三十三石	三十三石
三人吉三	三人吉三
四十両	四十両
暫し	暫し
島衛	島衛
児雷也	児雷也
新血屋舖	新血屋舖
心中鬼門角	心中鬼門角
水天宮	水天宮
助六	助六
隅田春	隅田春
曾我勢	曾我勢
梅雨小袖	梅雨小袖
天満宮	天満宮
時枯梗	時枯梗
魚屋茶碗	魚屋茶碗
なぐさみ曾我	なぐさみ曾我
鳴神	鳴神
八幡祭	八幡祭
飛鳥見	飛鳥見
富三見	富三見
仏母摩耶山	仏母摩耶山
仏の原	仏の原
水木辰之助	水木辰之助
伊勢首頭	伊勢首頭
伊勢平氏	伊勢平氏
因幡小僧	因幡小僧
入間詞	入間詞
浮世柄	浮世柄
宇都谷峠	宇都谷峠
阿国御前	阿国御前
幼稚子敵討	幼稚子敵討
お染久松色説	お染久松色説
加賀萬	加賀萬
籠釣瓶	籠釣瓶
唐崎八景	唐崎八景
韓人漢文	韓人漢文
勸進帳	勸進帳
吉祥天女	吉祥天女
吉備大臣	吉備大臣
金竜橋	金竜橋
天衣粉	天衣粉
桑名屋徳蔵	桑名屋徳蔵
毛拔	毛拔
黄門記	黄門記
金種目	金種目
小袖曾我	小袖曾我
五大刀	五大刀
三十三石	三十三石
三人吉三	三人吉三
四十両	四十両
暫し	暫し
島衛	島衛
児雷也	児雷也
新血屋舖	新血屋舖
心中鬼門角	心中鬼門角
水天宮	水天宮
助六	助六
隅田春	隅田春
曾我勢	曾我勢
梅雨小袖	梅雨小袖
天満宮	天満宮
時枯梗	時枯梗
魚屋茶碗	魚屋茶碗
なぐさみ曾我	なぐさみ曾我
鳴神	鳴神
八幡祭	八幡祭
飛鳥見	飛鳥見
富三見	富三見
仏母摩耶山	仏母摩耶山
仏の原	仏の原
水木辰之助	水木辰之助

伊勢首頭	伊勢首頭
伊勢平氏	伊勢平氏
因幡小僧	因幡小僧
入間詞	入間詞
浮世柄	浮世柄
宇都谷峠	宇都谷峠
阿国御前	阿国御前
幼稚子敵討	幼稚子敵討
お染久松色説	お染久松色説
加賀萬	加賀萬
籠釣瓶	籠釣瓶
唐崎八景	唐崎八景
韓人漢文	韓人漢文
勸進帳	勸進帳
吉祥天女	吉祥天女
吉備大臣	吉備大臣
金竜橋	金竜橋
天衣粉	天衣粉
桑名屋徳蔵	桑名屋徳蔵
毛拔	毛拔
黄門記	黄門記
金種目	金種目
小袖曾我	小袖曾我
五大刀	五大刀
三十三石	三十三石
三人吉三	三人吉三
四十両	四十両
暫し	暫し
島衛	島衛
児雷也	児雷也
新血屋舖	新血屋舖
心中鬼門角	心中鬼門角
水天宮	水天宮
助六	助六
隅田春	隅田春
曾我勢	曾我勢
梅雨小袖	梅雨小袖
天満宮	天満宮
時枯梗	時枯梗
魚屋茶碗	魚屋茶碗
なぐさみ曾我	なぐさみ曾我
鳴神	鳴神
八幡祭	八幡祭
飛鳥見	飛鳥見
富三見	富三見
仏母摩耶山	仏母摩耶山
仏の原	仏の原
水木辰之助	水木辰之助
伊勢首頭	伊勢首頭
伊勢平氏	伊勢平氏
因幡小僧	因幡小僧
入間詞	入間詞
浮世柄	浮世柄
宇都谷峠	宇都谷峠
阿国御前	阿国御前
幼稚子敵討	幼稚子敵討
お染久松色説	お染久松色説
加賀萬	加賀萬
籠釣瓶	籠釣瓶
唐崎八景	唐崎八景
韓人漢文	韓人漢文
勸進帳	勸進帳
吉祥天女	吉祥天女
吉備大臣	吉備大臣
金竜橋	金竜橋
天衣粉	天衣粉
桑名屋徳蔵	桑名屋徳蔵
毛拔	毛拔
黄門記	黄門記
金種目	金種目
小袖曾我	小袖曾我
五大刀	五大刀
三十三石	三十三石
三人吉三	三人吉三
四十両	四十両
暫し	暫し
島衛	島衛
児雷也	児雷也
新血屋舖	新血屋舖
心中鬼門角	心中鬼門角
水天宮	水天宮
助六	助六
隅田春	隅田春
曾我勢	曾我勢
梅雨小袖	梅雨小袖
天満宮	天満宮
時枯梗	時枯梗
魚屋茶碗	魚屋茶碗
なぐさみ曾我	なぐさみ曾我
鳴神	鳴神
八幡祭	八幡祭
飛鳥見	飛鳥見
富三見	富三見
仏母摩耶山	仏母摩耶山
仏の原	仏の原
水木辰之助	水木辰之助

壬生大念仏	壬生大念仏
名歌徳	名歌徳
樽太鼓	樽太鼓
矢の根	矢の根
四谷怪談	四谷怪談
与話情	与話情
紀伊集	紀伊集
黄・II 黄表紙	黄・II 黄表紙
咄多雁取帳	咄多雁取帳
艶気樺焼	艶気樺焼
栄花夢	栄花夢
金生木	金生木
孔子篇	孔子篇
高慢齋行脚日記	高慢齋行脚日記
御存商売物	御存商売物
心学早染草	心学早染草
造化夢	造化夢
馬鹿長命子氣物	馬鹿長命子氣物
文武二道万石通	文武二道万石通
無益委記	無益委記
義経記	義経記
鳩翁話	鳩翁話
狂・II 狂言	狂・II 狂言
大蔵虎明	大蔵虎明
狂言本	狂言本
狂言六義	狂言六義
和泉流	和泉流
狂言記	狂言記
悪太郎	悪太郎
合柿	合柿
石神	石神
今参	今参
瓜盗人	瓜盗人
岡太夫	岡太夫
伯母が酒	伯母が酒
柿山伏	柿山伏
金岡	金岡
鐘の音	鐘の音
雁雁金	雁雁金
木六駄	木六駄
口真似	口真似
膏藥焼	膏藥焼
昆布売	昆布売
察化	察化
三片輪	三片輪
地藏舞	地藏舞
止動方角	止動方角
痺り	痺り
けいせい壬生大念仏	けいせい壬生大念仏
名歌徳	名歌徳
樽太鼓	樽太鼓
矢の根	矢の根
四谷怪談	四谷怪談
与話情	与話情
古事記	古事記
日本書紀	日本書紀
東海道四谷怪談	東海道四谷怪談
与話情浮名横櫛	与話情浮名横櫛
江戸生艶気樺焼	江戸生艶気樺焼
江金先生栄花夢	江金先生栄花夢
莫切目根金生木	莫切目根金生木
金金先生造化夢	金金先生造化夢
犬山伏	犬山伏
伊文字	伊文字
鳥帽子	鳥帽子
蚊男	蚊男
蟹山伏	蟹山伏
河原太郎	河原太郎
不聞座頭	不聞座頭
闇罪人	闇罪人
柑子	柑子
座座	座座
猿座頭	猿座頭
二千石	二千石

[illegible]

出典略称等一覽——二〇

近江のお兼 おのうめ	正礼附 せいれい	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
梅兒嘗美 うめこがみ	春色梅兒嘗美 しうしきうめこがみ	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
英対暖語 えいたいだんご	春色英対暖語 しうしきえいたいだんご	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
恩愛二葉草 おんあいふたえはくさ	恩愛二葉神符 おんあいふたえしんぷ	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
恋の染分解 こいのぞめかい	春色恋廻染分解 しうしきこいのぞめかい	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
辰巳園 たつみえん	春色辰巳園 しうしきたつみえん	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
玉櫛 たまみ	春色玉櫛 しうしきたまみ	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
当世虎之巻後編 たうせいこゝろの巻のあと編	春色離之梅 しうしきりいのうめ	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
籬の梅 さだのうめ	清談松の調 せいだんしょうのてう	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
松の調 しょうのてう	春色文章娘節用 しうしきぶんじやうぢやうけつよう	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
娘節用 ぢやうけつよう	春色恵の花 しうしきめぐみのはな	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
恵の花 めぐみのはな	春色雪の梅 しうしきゆきのうめ	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
雪の梅 ゆきのうめ	夜の寝覚 よるのねざめ	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
能作書 のうさく	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
野ざらし紀行 のざらしきぎやう	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
祝詞 いのち	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
梅松調 うめしょうてう	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
咄 うた	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
あられ酒 あられさけ	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
居合刀 いあて	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
機嫌袋 きげんふくろ	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
昨日は今日 けふはけふ	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
五色紙 ごしき	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺	遍照 へんしょう	供奴 くわぬ	助六 すけむす	近世
御前男 ごぜんおとこ	延喜式祝詞 えんぎしきのいのち	日葡辞書 にっぽんじしょ	人 ひと	中務内侍日記 なかむすけの日記	吉原雀	娘道成寺				

風雅	風姿花伝 ふうさけでん	難波の兒は伊勢の白粉 いにはわのちからこは	色道大鏡 しきだいきやう
風葉集	武家名目抄 ぶけなめいしょう	野郎のぎりこぶし	難波の顔
冬の日 ふゆのひ	木末	吉原人おむねたね	野郎のぎりこぶし
文華秀麗	豊後風土記		
平家	平治		
平中	平治物語 へいぢものがたり		
平中物語 へいぢものがたり	和英語林集成 わごえりんしゅうせい		
保元	保元物語 へいげんものがたり		
方丈記 ほうぢょうき	宝物集 たからものしゅう		
宝物	発心集 はつしんしゅう		
堀河集	待賢門院堀河集 たいてんもんいんけふかしゅう		
堀河百首	堀河院百首 けふかゐんひゃくしう		
本草和名 ほんそうわな			
本朝文粹 ほんしやうぶんすい			
毎月抄 まいげしやう	枕草子 まくらぐさ		
増鏡 ぞうきやう	章段は古典文学大系本 岩波書店刊 によつた。		
松の葉 まつのは	万葉集 まんやふし		
万代集	万代和歌集 まんのだいわ		
水鏡 みづきやう	類聚名義抄 るいじゆめいしやう		
名義抄 なぎしやう			
無名草子 むななぐさ			
紫式部日記 むらさきしきぶにき			
明月記 めいげつき			
明衡往来 めいけうわらい			
蒙求抄 もうぼうしやう			
毛詩抄 もうししやう			
文徳美談			
八雲御抄 やみかみしやう			
柳多留			
大和			
夢見草 ゆめみぐさ			
謡曲 うたば			
葵上 あひのうへ			
安宅 あたけ			
安達原 あんだはら			

敦盛 あつなり	海士 うし	綾鼓 あやづめ	并岡 ならおか
生田敦盛 なきたあつなり	一角仙人 いっかくせんじん	雲林院 うんりん	雲林 うんりん
歌 うた 占 うらな	善知鳥 ぜんちどり	大原院幸 おおはらのきさち	杜若 つづき
江口 えぐち	鳥帽子折 とりぼうしをり	鉄輪 てつりん	菊怒童 きくどどう
翁 おきな	姨捨 いへすて	朽木 くしき	鞍馬大狗 くらまたいく
景清 けいせい	花月 はなづけ	清経 きよね	西行物狂 さいぎやうものくる
通小町 とほこまち	邯鄲 かんたん	恋重何 こいしげなん	西行 さいぎやう
砧 きぬ	七騎落 しちきりおち	小袖曾 こさて	自然居士 しぜんこし
元服曾 もとふくぞう	七騎落 しちきりおち	昭君 しやうきん	隅田川 うすだがは
小鍛冶 こくわ	千手 せんじゆ	谷行 やぎやう	卒都婆小町 すつだばこまち
高砂 たかさな	竹生島 たけなうじま	定家 さだけ	田村 いづむら
檀風 だんぷう	土蜘蛛 どくろ	融家 ゆうけ	天鼓 てんこ
道成寺 みちなりやう	巴 やま	朝長 あさなが	木賊 もくそく
野宮 ののみや	半部 はんぶ	野守 のしゆ	羽衣 うゑ
垣田 かきだ	雲水 うんすゐ	雲雀 うずさき	班女 はんにょ
藤戸 ふとう	二人静 ふにんしやう	松風 しょうふう	三輪 さんりん
船弁慶 ふねべんけい	盛久 もりひさ	松風 しょうふう	八島 やしま
紅葉狩 もみぢがし	夕顔 ゆがな	楊貴妃 やうきひ	遊行柳 ぎやうぎやうりやう
山姥 やまば	羅生門 らせいもん	弱法師 じやくほふし	夜討曾 よづつぞう
吉野静 よしのしづ	羅生門 らせいもん	輪藏 りんざう	雷電 らいでん
能野 のの	羅生門 らせいもん	昔語稻妻表紙 せきごふいなづまのうしろ	近世 きんせい
羅生門 らせいもん	羅生門 らせいもん	雨月物語 あめづきものがたり	近世 きんせい
稻妻表紙 いなづまのうしろ	雨月 あめづき	雨月物語 あめづきものがたり	近世 きんせい
八天伝 やちてんでん	春雨 はるふゆ	雨月物語 あめづきものがたり	近世 きんせい
美少年録 みせうねんろく	春雨 はるふゆ	近世説美少年録 きんせいせつみせうねんろく	近世 きんせい
本朝醉菩提 ほんちゆうすいびだい	春雨 はるふゆ	本朝醉菩提 ほんちゆうすいびだい	近世 きんせい
夢想兵衛 むそうべゐ	春雨 はるふゆ	夢想兵衛 むそうべゐ	近世 きんせい
可張月 かちやうつき	春雨 はるふゆ	椿説可張月 つばきせつかちやうつき	近世 きんせい
落葉集 らくがふし	可張月 かちやうつき	落葉集 らくがふし	近世 きんせい
蘭学事始 らんがくじ	可張月 かちやうつき	蘭学事始 らんがくじ	近世 きんせい
隆達節 たうだつせつ	可張月 かちやうつき	隆達小集 たうだつせうしふ	近世 きんせい
靈異記 れいぎ	可張月 かちやうつき	日本靈異記 にっぽんれいぎ	近世 きんせい
梁塵秘抄 りやうじんひせう	可張月 かちやうつき	梁塵秘抄 りやうじんひせう	近世 きんせい
林葉集 りんがふし	可張月 かちやうつき	林葉和歌集 りんがわかしふ	近世 きんせい
六百番歌合 ろくひつばんかあひ	可張月 かちやうつき	日本大文典 にっぽんだいぶんてん	近世 きんせい
和漢朗詠 わかんらうやう	可張月 かちやうつき	和漢朗詠集 わかんらうやうしふ	近世 きんせい
和訓栞 わくしり	可張月 かちやうつき	和訓栞 わくしり	近世 きんせい
名抄 なせう	可張月 かちやうつき	和名類聚抄 わなるいよしふ	近世 きんせい

俳句

・本文の季のあとの《》の中に示した俳句の、主な作者を掲げた。

近代・現代

青木月斗あきぎ つとむ
 飯田蛇笏いひだ へびしやく
 今井つる女いまい つるめ
 加藤楸邨かとう けうそん
 河東碧梧桐かとう へきわく
 清原杢吉きよはら けきち
 後藤夜半ごとう はん
 杉田久女すぎた くのめ
 鈴木花菱すずき はなむぎ
 高浜年女たかばし ねんめ
 田村木尾たむら きぶし
 内藤鳴雪ないとう なるせつ
 中村汀女なかつ村 とうにょ
 野村汴月のむら へんげつ
 長谷川素遊はせがわ 素ゆう
 原石鼎はら いで
 星野立子ほしの たてこ
 正岡子規ただおか しのぶ
 松本たかしまつもと たかし
 皆吉栗雨みなきち りゅう
 森川曉水もりがわ しょうすい
 山口青邨やまぐち せいそん
 渡辺水巴わたべ みづうら
 石田渡郷いしだ わたせ
 大橋越央子おほはし 越おうし
 川端孝舍かわはた けうさ
 虚子うつし
 高浜虚子たかばし うつし
 久保田万太郎くぼた まんたろう
 芝不器男しば ぶきお
 鈴鹿野風呂すずか のふうろ
 高野素十たかの 素じゅう
 竹下しづの女たけした しづのめ
 富安風生ふやす ふうせい
 中村草田男なかつ村 くさたんお
 西山泊雲にしやま せきうん
 長谷川かな女はせがわ かなめ
 長谷川零余子はせがわ ぜいよし
 日野草城ひのくさ せうじやう
 前田晋羅まへだ しんら
 松瀬青々まつせ せいせい
 水原秋桜子みづはら あきお
 村上鬼城むらかみ きじやう
 山口雪子やまぐち せうし
 吉岡陣寺洞よしおか じんじやうどう

近世

一茶(小林 一茶(いちんか))
其角(樹本其角(きくもと けいかく))
晚台(加藤晚台(かとう ばんたい))
杉風(杉山杉風(すぎやま すぎふう))
白雄(河合白雄(わい びやく))
曾良(河合曾良(わい ぞう))
千代(加賀千代(かが ちよ))
芭蕉(松尾芭蕉(しょう ばけう))
史郎(中村史郎(なかつむら しばらう))
野坡(志太野坡(しただ ののり))
闍更(高桑闍更(たかさう せつめい))
蓼太(大島蓼太(おおしま れうた))

鬼寶(上島鬼寶(かみじま きぼう))
几童(高井几童(たかい ぎどう))
去来(向井去来(むかい きょらい))
召波(黒柳召波(くろやなぎ しょうは))
素堂(山口素堂(やまぐち そうだう))
太祇(大祇(おほし))
椿良(三浦椿良(さんぽう ちんりやう))
蕪村(与謝蕪村(よしかへ ぶそん))
凡也(有幾井也(あやい げい))
嵐雪(服部嵐雪(はっとり ぶんせつ))